

高をくくくくって身震い



多くの認知症は、65歳を過ぎて発病する。というのに、この頃は、若いひとでさえ認知症に怯えているようにみえる。

例によって、「ひとの名前を思い出せない」という50歳台のひとたち。皆さん、年相応です。次は、「ブレーキとアクセルを間違えそうになった。これも認知症？」という38歳の女性。でも、検査では、どこにも異常が見つからない。車を発進する時に、ひどく気になることがあったよ

「認知症不安病」では

うだ。と、あまりに「認知症不安病」の患者さんが続くので、ワッシーも疲れてきた。

そんな、ある日。46歳の男性が、「1カ月くらい前から、時々、言いたいことを言い間違えて、違う言葉が出てしまう。これも認知症では？」と言ってきた。「語性錯語」という症状で、例えば、「りんご」と言うつもりが、「みかん」と言い間違えるようなものだ。これも、脳が疲れたような時、誰でも経験しそつである。

もつとも、「語性錯語」もずっと

続くようなら失語症で、大体は左大脳半球にある言語中枢の障害が原因である。頭部MRI（磁気共鳴画像装置）の検査をすれば分かる。でも、正直に言おう。その時ワッシーは、「このひと、心配のし過ぎでは」と高をくくっていたのである。

ところが、MRIの写真には、左大脳半球だけではなく、右にも異常

脳腫瘍で寝たきりに

が見える。どうして錯語だけの症状で済むのか、不思議でならないほどである。だが、そこが脳の恐ろしいところだ。脳は、症状を出すまではジツと我慢の子だ。だが、出だしたら、アツという間に症状はひどくなる。患者さんは脳腫瘍と診断され、3カ月も経たずに寝たきりになった。

あの時、もし検査をしなかったらと思うと、今でも身震いする。思い込みは怖い。患者さんはひとりひとり違うのだ。心してかからねば。

（石黒修三 しいしぐるクリニック・脳神経外科専門医、金沢市在住）